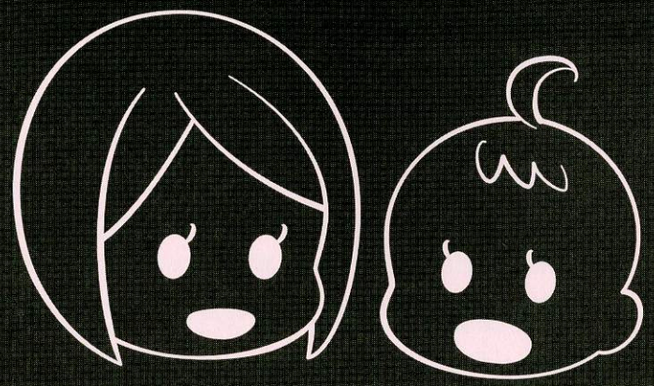
公益財団法人成長科学協会 第27回公開シンポジウム



子どもと母へのサプリメント
～科学の観点から～

児玉浩子 帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科教授
「子どもと母へのサプリメント使用の現状と課題」

谷口洋子 谷口医院副院長
「オーソモレキュラー療法（分子栄養学に基づく栄養療法）
～胎児期 乳幼児期の食育が人生に影響する！～」

●指定討論：宮尾 益知（どんぐり発達クリニック院長）
●司　　会：髙橋 桃子（日本大学医学部附属板橋病院小児科）

日時 2014.6.14 [sat] 13:30～16:30 (OPEN 13:00)
会場 UDXシアター（秋葉原UDXビル4階）
参加無料

INTRODUCTION

ごあいさつ

公益財団法人成長科学協会
理事長：田中 敏章

成長科学協会は、昭和 52 年に成長ホルモン治療の適正事業を中心に設立され、ヒトの成長に関する科学の研究助成などを行ってきました。しかし身体的成長だけでなく、子どもの心の健全な発達も重要であるため、平成 4 年に心の発達研究委員会を発足させました。

その委員会（委員長：長田久雄）は公開シンポジウムを企画し、これまで「心を伝えあう親子関係」「子どもの食生活と心の発達」「豊かな思春期への支援」「子どもの豊かなコミュニケーションと心」など、いろいろなテーマで子どもの心の問題を取り上げてきました。今年 27 回目は「子どもと母へのサプリメント～科学の観点から～」というテーマで、お二人の専門家の先生にご提言いただきます。

児玉浩子先生には、米国での妊婦・授乳婦および乳児・小児におけるサプリメントの現状と、信頼できる情報による食育の推進についてお話しいただきます。また谷口洋子先生においては、アトピー性皮膚炎やチック、不定愁訴の子ども達の治療の経験から、不足している栄養素を補うオーソモレキュラー療法についてお話しいただきます。

子どもと母のサプリメントに関する信頼できる情報を共有していただき、 当委員会の宮尾益知先生を交えて、実りあるディスカッションができればと思っております。ご参加の皆様も積極的に発言していただければ幸いです。

タイムスケジュール

日時：平成 26 年 6 月 14 日（土）
テーマ：「子どもと母へのサプリメント ～科学の観点から～」

13：30	開会あいさつ
13：35	「子どもと母へのサプリメント使用の現状と課題」 児玉 浩子（帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科教授）
14：25	「オーソモレキュラー療法（分子栄養学に基づく栄養療法） ～胎児期 乳幼児期の食育が人生に影響する!～」 谷口 洋子（谷口医院副院長）
15：15	〈休憩〉
15：30	指定討論
15：50	質疑応答・ディスカッション
16：30	閉会

提　言

子どもと母へのサプリメント使用の現状と課題　/ 児玉 浩子

サプリメントが急速に普及しているのは世界的な傾向で、米国等では、妊婦・授乳婦および乳児・小児が対象のサプリメントも多種多様のものが安価で市販されている。また、米国小児科学会は母乳栄養児にビタミンDのサプリメント使用を推奨している。このような状況下で、米国、中国、韓国などでは小児のサプリメント使用は30%以上であり、タイでは生後6か月までの乳児の約35%がサプリメントを使用していると報告されている。一方、サプリメント使用による健康被害も報告されている。
我が国でも近年15～20%の小児がサプリメントを使用していると報告されている。マスコミやインターネットでの販売業者の宣伝等の影響も大きい。
現在、消費者庁は米国のダイエタリーサプリメントの表示制度を参考に"食品の新たな機能性表示制度"を検討しており、今後この制度が小児や母親のサプリメント使用に与える影響も大きいと思われる。
「日本人の食事摂取基準」の各栄養素の推奨量は、バランスの良い食事で摂取可能である。しかし一方的にサプリメントを"必要ない"と言うのではなく、信頼できる情報や栄養・食に関する知識を保護者に提供し、食育を推進することが極めて大切である。

オーソモレキュラー療法（分子栄養学に基づく栄養療法）～胎児期 乳幼児期の食育が人生に影響する!～ / 谷口 洋子

ヒトの体は60兆個の細胞でできている。個々の細胞の機能は、細胞を構成している物質（分子）と、細胞を働かせる酵素やホルモンなどの物質の濃度によって決まる。
オーソモレキュラー療法は、不足している物質、つまり栄養素を補うことで不定愁訴や疾病を改善していこうとする栄養療法である。アトピー性皮膚炎の子ども達を、ステロイド軟膏に依存せずに改善させることを17年前から継続しているが、7年前に栄養療法の考え方を取り入れてから改善が速くなった。また、栄養療法により、チックや朝起き不良、登校前の腹痛や頭痛など、不登校につながりがちな不定愁訴においても良い効果を経験している。アトピー性皮膚炎の乳児の母親に、妊娠中の体調を聴取すると様々な栄養障害を持っていたと推測できるケースが多い。胎児期に胎盤を通じて受け取るべき栄養素の不足によって、生後、粘膜や皮膚や精神神経系など様々な問題に影響していることをお伝えしたい。
妊娠中に、蛋白質、鉄、亜鉛、ビタミンB群などを中心とした栄養療法を試みた母子の状態の調査により、アレルギー疾患になりにくい、感染症にかかりにくい、情緒が安定している、睡眠の質が良い、溢乳や下痢などが少なく母乳哺育が継続できるなど、同じ母親から先に生まれた子と比較すると、とても良いことを実感している。
また、最近注目されているビタミンDは、カルシウム吸収の他にも免疫調節や細胞の分化にかかわるなど、様々な働きがあることが明らかになっている。ビタミンD濃度が、一般的に使われている基準値内にあれば十分な量というわけではなく、乳児から成人までビタミンD不足が多いにもかかわらず、日本では認識が低いという問題にも言及したい。

演　者

児玉 浩子 / こだま ひろこ

1970年大阪大学医学部卒業、大阪大学小児科助手、自治医科大学小児科講師、帝京大学小児科講師・助教授・教授を経て、2011年より現職（帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科教授・学科長）、帝京大学小児科客員教授併任。日本臨床栄養学会理事、日本微量元素学会理事、日本先天代謝異常学会監事、日本学術会議連携会員、日本医師会学術企画委員、日本小児科学会栄養委員会委員、厚生労働省「日本人の食事摂取基準2015年版」策定委員。

谷口 洋子 / たにぐち ようこ

1982年神戸大学医学部卒業。東京大学小児科、自治医科大学小児科での研修を経て、1988年産婦人科医の夫の故郷である栃木県高根沢町で産婦人科小児科医院を開設。分娩を扱う産婦人科医の傍らで、新生児期から思春期までを診る小児科医として地域小児医療に従事し今に至る。
所属学会は日本小児科学会、日本外来小児科学会、日本小児アレルギー学会、日本ビタミン学会、日本抗加齢医学会、国際オーソモレキュラー学会。

指定討論

宮尾 益知 / みやお ますとも

どんぐり発達クリニック院長。徳島大学医学部卒業、自治医科大学小児科学教室助教授、国立成育医療研究センターこころの診療部発達心理科医長を経て、2014年4月より現職。専門は小児精神神経疾患、発達障害、高次認知機能障害、てんかんなど。

司　会

髙橋 桃子 / たかはし ももこ

臨床心理士。東京女子大学文理学部心理学科卒業、白百合女子大学大学院発達心理学専攻修士課程修了。日本大学医学部附属板橋病院小児科に勤務。

主催　公益財団法人 成長科学協会
企画運営　心の発達研究委員会
〒113-0033 東京都文京区本郷5-1-16 NP-Ⅱビル
TEL. 03-5805-5370